

オヤングレン著『日本文典』（その5）

岡 本 信 照 訳

〈Resumen〉

A continuación del volumen anterior, aquí presentaré una versión japonesa del *Arte de la lengua japona* de Melchor Oyanguren de Santa Inés (México, 1738), editado por Otto Zwartjes en 2009. Esta quinta parte corresponde a todos los capítulos del Libro III.

第 3 卷

その他の品詞について

日本語の名詞，代名詞，動詞，過去分詞については十分に論じたが，副詞をはじめ，他の品詞についても論じなければならない。本書第3巻は残りの品詞について扱う。

第4部 副詞全般について

副詞はその語源から分かるように，ラテン語では動詞に後続するが，日本語では多くの場合に前置される。第1巻では多くの品質の副詞が扱われ，代名詞の中で副詞のいくつかについて述べられたが，本章の主題がまさにそれであるため，煩わしくならないよう，再度手短に触れることとしよう。

第1章 時の副詞について

時と場所を表す共通の副詞をもつ多くの言語に見られることが日本語にも見られる。たいてい副詞は両方の意味を表す機能をもつが，次節以下で述べるように，中には時のみを表す特殊なものや場所のみを表す特殊なものもある。同様のことは場所に関する代名詞的な副詞についても言える。

1. 時の疑問副詞

第1巻では代名詞について述べた際に，疑問詞のいくつかを扱った。「いつ」を尋ねるために，時を表す同じ名詞が使用される。例えば，fi（日），nen（年），toqi（時），qizami（刻み）また

は jicocu (時刻) などであり、これらと疑問詞とが合成される。例, ytçu (いつ), itçuco¹⁾ (いつぞ), itçuxica (いつしか), itçugoro (いつ頃), itçunojibuni (いつの時分に), toqi (時), toqiva (時は) など。詩人の間では izzura (いずら) が、文章体では soban (早晩) が使用される。その他の例: iccasaqifi? (幾日先に), fibini (日々に), nendai icafodono? (年代如何程に), nengiu (年中), nannen? (何年), nannen maye? (何年前), nannen saqui? (何年先), sunen (数年), itçumade? (いつまで), aidani? (間に) itçucara? (いつから), itçuno? (いつの) または itçuno yo? (いつの世), icatoqi? (如何時), icutoxi? (幾年), cotoxi (今年), votodoxi または vototoxi (一昨年), icuca? (幾日), qino (昨日) または qinova (昨日は), icanofizzuqeca? (如何の日付か), toxigotoni (年ごとに) など。最後の例の gotoni (~ごとに) は、よく別の語と合成される。例, yogotoni (夜ごとに)。

その他の例: jijicocuni (時々刻々に), issacujit (一昨日), issocuya²⁾ (一昨夜) または votorino yo (お通り³⁾の夜), xiassate (明々後日), xibaxi (暫し); Xibaxi vomachi are (暫しお待ちあれ), chobo (朝暮), asayu (朝夕), cochuni (古注に)⁴⁾, cocon (古今), inixiye (古), ima (今), chicaicoro (近い頃) または chicaifodo (近い程), aini (間に), toqigotoni (時ごとに), vógo cara imani itaru made (往古から今に至るまで), tamasacani (邂逅に)⁵⁾ など。

miocho (明朝) または aguru axita / asa (明くる明日 / 朝), axito⁶⁾ (明日), mioban (明晩) または asuno banguai (明日の晩景)⁷⁾, asuno cure (明日の暮れ), asuasatte (明日明後日), igonigo⁸⁾ (自今以後), imaiori nochi (今より後), imaiorixiteva (今よりしては), qeóóc (向後)⁹⁾, qio または qeo (今日), conichi または connit (今日), connichigui¹⁰⁾ (今日中), conichino vchi (今日の内), aqinofi (明きの日), aqurufi (明くる日), mionit (明日), mio gonichi (明後日), yagate (やがて), fodonacu (ほどなく), tafegi¹¹⁾ (?), socujini (即時に), sacani (さかいに), sacocu (即刻), sacon (昨今), tanteqi (端的) など。

2. 代名詞的な副詞

sorecara (それから), soreyori (それより), sono nochi (その後), corecara (これから), coreyori (これより), arecara (あれから), areyori (あれより), condo (今度), imanotabi (今の度), curegure (くれぐれ), caysu gayesu (返す返す), conaida (此間), cofodo¹²⁾ (この程), conigui¹³⁾ (この中)¹⁴⁾, conogoro (この頃), xendo (先度)¹⁵⁾, xenjit (先日), saqinofi (先の日), soreyori (それより), conocata (それよりこの方) など。

cauas gauasu (交わす交わす) または cauari gauari (代わり代わり), aitagaini (合ひ互いに), caccacuni (各々に), chógio (重畳), casane tatamu (重ね畳む), caysugayesu (返す返す), cacunobun (かくの分に), cacu (かく), cacunogotocuni (かくの如くに), conobun (この分), conobunni (この分に), cayoni (斯様に) または có (こう), casanete (重ねて), cacunogotoquaru (かくの如くある) または cacunogotoqu aru tococoroni¹⁶⁾ (かくの如くあるところに), cacaru (かかる) または cayonaru gotoqu varu (斯様なる如くある)。

多くの実詞と形容詞が合成されるのと同様、時と場所の副詞の多くは指示的な語と合成される。例, *achi cochi* (あちこち), *achisama curusama* (あちさま, くるさま)¹⁷⁾, *anata* (あなた), *có* (こう), *cochi* (こち), *coco* (ここ), *amasaye* (剩へ)¹⁸⁾, *amatabi* (数多度), *anomuqi* (あの向き), *canete* (予ねて) または *canegade*¹⁹⁾ (予ね予ね), *canecoto* (予ね事), *conban* (今晚), *qeono cure* (今日の暮れ), *concho* (今朝), *qesa* (今朝), *congiu* (この中), *mayeno gotocu* (前の如く) など。

他に, *conxun* (今春) または *conofaru* (この春), *conya* (今夜) または *coyoi* (今宵), *conxeqi* (今夕), *qio cure* (今日暮れ), *conomama* (このま), *core fodo made* (これ程まで), *fódo* (ほうど) または *tódo* (とうど)²⁰⁾, *fodo fodoni* (程々に), *fodoni* (程に) などがある。語によっては次のような結びつきもある。例, *qeoco* (向後) または *yucu suye* (行末)。

ここで、特殊性、全体性、配分を表す副詞をまとめておく。例, *nabari*²¹⁾ (並びに), *tçuguini* (次に), *vaqite* (別きて)²²⁾, *xemete* (せめて), *icqèoni* (逸興に)²³⁾, *bacari* (ばかり), *inomi*²⁴⁾ (～のみ), *caccacuni* (各々に), *bunni* (分に), *bexxite* (別して), *tojenni* (徒然に)²⁵⁾, *amaye*²⁶⁾ (剩へ), *cutto* (くっと)²⁷⁾, *tçuneni* (常に) または *tçunezzune* (常々), *tabigotoni* (度ごとに) または *maido* (毎度), *iefitomoni* (是非ともに) または *iefinivoite* (是非において), *fararito* (はらりと)²⁸⁾, *tonimo cónimo* (兎にもこにも), *xoxen* (所詮), *toqinoyotte* (時の依って), *tomo sureba* (とますれば) または *yaymo sureba* (やいもすれば) など。

3. いくつかの強調の副詞について

強調の合成動詞があるのと同様、強調の副詞も存在する。ここではその中のいくつかを挙げておくが、さらなる個々の語については『語彙集』およびその用例集を参照されたい。

cappato (かぱっと) は「急いで起きるときの様子」を, *caracara* (からから) または *caracarato* (からからと) は「高笑いする様子」を表す。*caroxite* (辛うじて) は, *Carai inochiu tasucatta* (辛い命を助かった) のように用いられ, *fófo* (這う這う) または *yóyó* (漸う)²⁹⁾ は, *Fofu nigueta* (這う這う逃げた), *Fofono teide nigueta* (這う這うの体で逃げた) のように用いられる。

他に, *chachato* (ちゃちゃと) または *chacurito* (ちゃくりと) または *chacuto* (ちゃくと), *sosuco*³⁰⁾ (早速) または *sassocu* (早速), *fayacu* (早く/速く), *sumiyaca* (速やか), *soso* (早々), *fayo* (早う) などがある。例, *Soso moxi tçuqezu* (早々申しつけず)。*fixifixito* (ひしひしと) は急ぐ様子を, *doppito* (どびっと) は大騒ぎする様子を表す。例, *Doppito vameite touoru* (どびっと喚いて通る)。*chochodo* (丁々ど) は物を打ちつける様子を表す。例 *chóchódo utçu* (丁々ど打つ)。ただし, *chódo* (丁度) は「まさしく」を意味する。

cocoroyoxeni (心寄せに)³¹⁾ という語は *cocoro* (心) から派生している。ここから、結びついた語に応じて強調的意味を表す合成語が他にも出ている。例, *cocoroyocu* (快く), *cocoroyogueni* (心良げに), *cocoronicu* (心憎う), *cocoromotono* (心許無う), *cocorogacarini*

(心掛かりに) または cocorozucuxini (心尽しに)³²⁾ など。

他に, *fatafatato* (はたはたと), *fatato* (はたと), *fayabaya* (早々) などがある。なお, *chirachirato* (ちらちらと) は大慌てする様子を, *chirigiri* (散り散り) は四方に散らばっている様子を, *chirichirito* (ちりちりと) は軽快に走る様子を表す。*yauara* (やわら) または *yauara yauara* (やわらやわら) は「ゆっくり, こっそり」を意味する。例, *Yauara catanauo nuqi idasu* (やわら刀を抜き出す)。その他, *yenvento xite* (延々として), *yocoximani* (邪に), *vccarito* (うっかりと), *ucaucaxú* (うかうかしゅう) または *ucaucato* (うかうかと), *racuracuto* (楽々と), *tezzucara* (手づから)³³⁾ などがある。その他『語彙集』参照。

4. いくつかの場所の副詞について

ai (間), *aida* (間), *auai* (間), *ma* (間) という一連の語は副詞形として適用される。例, *toriuno aida* (逗留の間), *zaiqiono aida* (在京の間), *ichirino aida* (一里の間) など。

[カスティーリャ語の] “*dónde*” 「どこで」, “*de dónde*” 「どこから」, “*para dónde*” 「どこへ向かって」を尋ねる場所の副詞は *izzucu* (何処), *izzucata* (何処方), *doco* (どこ), *dochi* (どち), *dochira* (どちら), *donata* (どなた), *donotocoro* (どの所), *donofu* (どの方) で, 代名詞的な副詞を扱った第2節で見たように, 格助詞が後置される。例, *izzucava?* (何処は), *docono?* (どこの), *dochiye?* (どちへ), *donatavo?* (どなたを), *donocotori yori* (どのことりより) など。[カスティーリャ語の] “*hasta dónde*” 「どこまで」を表すためには *made* (～まで) が用いられ, 副詞と助詞の間に挿入される。例, *Docomadeye iqóca* (どこまでへ行こうか)。

ものを尋ねるときは常に疑問の小辞 *ca* (～か) か *ozo* (～うぞ) が文末に置かれ, 他に疑問の小辞がある場合は *ca* より *zo* のほうが多用される。例, *Izzucuye Ítaca? — Mexicoye* (何処へ行ったか — メキシコへ), *Izzucuno?* (何処の) または *Docono monoca* (どこの者か) など。

これらの語句と場所の名詞が合成されることもあり, *mo* (～も) や *naritomo* (～なりとも) という語が追加される。例, *docomademo* (どこまでも), *docomo caxicomo* (どこもかしこも) または *doconimo* (どこにも), *doconomono* (どこの者), *docotomo xiranu* (どことも知らぬ), *docoioromo*³⁴⁾ (どこよりも), *doco caramo* (どこからも), *donaritomo xeyo* (どなりと申せよ), *domo narozu* (どもなろうず) または *tomo narozu* (ともなろうず), *docoyenaritomo mairo* (どこへなりとも参らう) など。*do* (ど～) の部分は代名詞として機能するため, 上述の方法で時の副詞を作ることにもできる。例, *dococu* (同刻) または *dococuni* (同刻に), *sunawachi vonaji qizami* (同じ刻み)。

代名詞的な場所の副詞を作るためにも同じ格助詞が用いられる。というのは, それらの格助詞が [ラテン語の] “*ubi*” 「どこに」, “*unde*” 「どこから」, “*quo*” 「どこへ」, “*qua*” 「どこを通過して」などのうち, いずれの意味に属するかを表示するからだ。『語彙集』にも見られるように, こうした副詞の数は多く, 本巻第2節ですでに取り上げた通りである。例, *sonata atari* (そなた回り), *sono atari* (その回り), *sonofu* (その方), *sonata* (そなた), *soco* (そこ), *sochi* (そ

ち), socora (そこら), sochira (そちら), sonotocoro (その所), socuji (即時) または socujini (即時に), sanauachino³⁵⁾ toqi (即ちの時), achi (あち), achira (あちら), anata (あなた), are (あれ), anocata (あの方), asoco (あそこ), asocona (あそこな), asocomoto (あそこ元), co (此), cochi (こち), coconi (ここに), conotocoro (この所), coco (ここ), cocomoto (ここ元) など。その他『語彙集』参照。

5. 拡大と縮小を表すいくつかの副詞について

比較級・最上級を扱った際、意味を拡大あるいは縮小する副詞のいくつかについて述べた。このうちの多くは品質の形容詞と形容詞の間のみならず、別の語根と語根の間、別の品詞と品詞の間にも現れる。『語彙集』に用例が見られる。

疑問詞のいくつかは強意的か複数的になる場合もあれば、否定と結びついて意味を縮小するか否定する場合もある。例, chicagoro (近此)³⁶⁾, icusobacu (幾許)³⁷⁾, icutoxe (幾年), その他多数ある。cocomo caxicomo (ここもかしこも) や isasacamo (些かも) は否定と結びつく。例, Isasacamo zonzenu (些かも存ぜぬ) または Isasacamotte zonzenu (些かもって存ぜぬ), Yauacana (やわか成ろう)³⁸⁾ など。

chicurito (ちくりと), chicuchicu (ちくちく) または chicuchicuto (ちくちくと), chocchoto (ちよちよっと), chito chito (ちとちと) または chitto chitto (ちとちと), xenocu³⁹⁾ (先刻), iyen (以前), ittan (一旦), ittoqi (一時), muxiro (むしろ), xemete (せめて), sucunutemo (少のうても), massono (真っその)⁴⁰⁾, massonosoba (真っその傍), massono atari (真っその辺り), massoba soxi (真傍造次), soxi tempai (造次顛沛)⁴¹⁾, yayamo sureba (ややもすれば), yayafisaxú (やや久せう) など。

いくつかの疑問副詞を本節でまとめておく。小辞 no? (～の) や na? (～な) は依頼をするときや他人の意図・計略を知りたいときに用いられ、前置される場合と後置される場合とがある。例, No Pedro dono? (のう, ペドロ殿), Gozaro cono? (ござろう, この), Soqiqitano (そう聞きたの) など。ここで、呼びかけの副詞もまとめておいてもよい。

偶然に話しかけたり尋ねたりするためには, icasama (如何様), icasamanimo (如何様にも), moxi (もし), moxicuva (もしくは), xijien (至善), qedaxi (蓋し) などが用いられる。疑問にするには zo (～ぞ) か ca (～か) を追加するか、両方を追加する。しかし、若者は ya (～や) か caya (～かや) を用いる。疑惑の文では常に baxi (～ばし) が付される。例, Goyobaxi gozaruzo (御用ばしござるぞ)。ただし、この文は多くの場合、結びついた語根の意味を変えることはない。例, Nantobaxi gozaruca? (何とばしござるか), Qiribaxi suna (切りばしすな) など。文章体では小辞 ani? (鎧に) が使用される。例, Ani xacuson nhumet aranya? (鎧に釈尊入滅あらんや), Icadecca? (如何でか) など。

「さあ～しよう」という奨励を表す副詞がある。例, idemono mixo (いでもの見せう)⁴²⁾, izaiteqiro⁴³⁾ (いざ行て聞こう), tomairo (疾参らう)⁴⁴⁾ など。ea (えや), iza (いざ), izaiza (い

ざいざ), izataraba (いざたらば), izato (いざと), izaya (いざや), ide (出で), sa (さあ), saraba (さらば) といった語のいくつかは間投詞でもある。述べたことを確認するための語もある。例, coso (〜こそ), saraba (さらば), domamo⁴⁵⁾ (〜ども?), ariuomamani (あろうままに), chodo (丁度), maipponojiyoni⁴⁶⁾ (真^{まっほん}同じように) など。その他

iyaiya (いやいや) や no, no (のうのう) は物事を賞賛するときの間投詞で, Iya iya mi gotono coto (いやいや見事なこと) のように用いる。Nacanaca (なかなか) または nacanacani (なかなか) というものもある。例, Nacanacani xindaga maxigia (なかなか死んだほうがましじゃ), Nacanacanocoto? (なかなかのこと) など。yoxi (よし) という語もある。確認することの内容を同族語の意味の副詞を繰り返して強意の度合いを上げることもある。例えば, nauo (なお) から nauo motte (なおもって), nauomo (なおも), nauo mata (なおまた), nauo nauo (なおなお) などである。

他に, xicarube caró (然るべからう), xicaruni (然るに), xicarutoquia (然る時は), xicaruuo (然るを), xicaxxi yori conocata (然^{しか}っしよりこの方)⁴⁷⁾, Xicaxicato qicoyenu (確々^{しかしか}と聞こえぬ)⁴⁸⁾, Xicato vomoisadamete (確^{しか}と思ひ定めて) などがある。

第2章 前置詞すなわち後置詞について

日本語は我々のバスク語と同様に大部分が接続的であることはすでに述べた。前に置かれることからラテン人が前置詞と呼んだ品詞が日本語では後置詞となる。後置詞のいくつかは格助詞のところで説明済みで、その品詞自体はすでに読者の知るところである。

1. 属格の後置詞について

前置詞すなわち日本語の後置詞の多くは動詞か名詞に由来し、次の例に明確に見られるように、別の品詞に基づく。例, atari (辺り)。aigicani (合ひ直に), chicagicato (近々と), chicagicaxu (近々せう) の三語は時の副詞で、形容詞の chicaxij (近い) から派生している。その他, narabini (並びに) は iyeno narabini (家の並びに), fotori (辺^{ほとり}) は michino fotori (道の辺) のように用いる。

同じような状況の例を挙げると, quinjo (近所) という語は chicaqi tocoro (近き所) と同じ意味であり, qinjit (近日) は副詞で chicaqifi (近き日) と同じである。soba (傍) という語は, Fitono sobauo fanaruru (人の傍を離るる) のように用いる。他に, xitoto (しとと)⁴⁹⁾ という副詞もある。

このように、「近くのもの」を意味するその他の語、すなわちラテン語の前置詞 “circa” 「〜の周りに」、 “juxta” 「〜の傍に」、 “prope” 「〜の近くに」に相当する語をまとめることができる。

ラテン語なら “inter” 「〜の間に」で表すところを日本語では ai (間^{あい}), aifa (間^{あいは}), avai (間^{あわい}), aida (間^{あいだ}) が用いられる。naca (中) という語も nacabone (中骨), nacaba (半ば), nacara (半^{なか})

ら)などの例では「間」を意味することができる。例, *fino nacara* (日の半ら)。

同じことは *uchi* (内) にも当てはまる。例, *ieno uchi* (家の内), *Mairanu uchini* (参らぬうち) など。すべての文は属格を要求する。例, *voya cono aida* (親子の間), *Futarino aifaga varui* (二人の間が悪い), *reonai* (寮内)⁵⁰⁾ すなわち *reono uchini* (寮の内), *rincan* (林間) すなわち *fayaxino aida* (林の間) など。ここで、この種の前置詞のいくつかと合成された名詞があることに注意されたい。それらは単純に見えるがそうではない。単音節が侵食される場合や修辞で語中音が脱落することがよくあるからだ。これを日本人は *xóriacu* (省略) あるいは *chúriacu* (中略) と呼んでいる。chu (中) は *uchi* (内) や *chuni* (中に) と同じで, *chudan* (中段) とは *nacano dan* (中の段), *chubun* (中分) とは *naca vaquru* (中分くる), *suichu* (水中) とは *mizzuno uchi* (水の内) のことである。その他『語彙集』を参照のこと。例えば, *nai* (内) から *chonai* (町内) のような例が見られる。

ラテン語の前置詞 “super” 「～の上に」や “supra” 「～を越えて」または “superne” 「上部に」に対応する語が日本語では *uye* (上) である。例, *uyexita* (上下), *Uyexitamonó asotauamururu* (上下も無う遊戯るる) など。ラテン語の前置詞 “infra” 「～の下に」には *xita* (下), *gue* (下), *tei* (低), *xitaye* (下へ) が対応する。ここから *xitate* (下手), *xitatena* (下手な) などの語が出ており、それぞれの反義語は *vuate* (上手), *vuagasa* (上嵩)⁵¹⁾ または *vuacasa* (上嵩) である。*Naigue* (内外) は *uchifoca* (内外) と同じである。前置詞 “intra” 「～以内に」(副詞形は “interne” 「内部に」) に対応する語も *uchini* (内に) や *nainai* (内々) などである。例, *Nainai moxi ireoto zonzjita* (内々申し入れようと存じた), *iocai* (上界), *guecai* (下界) など。

[ラテン語の] “post” 「～の後に」や “postea” 「後に」対応する語が *igo* (以後), *nochi* (後), *nochini* (後に), *nochi notoqi* (後の時), *cococu* (後刻), *condo* (今度) で、これらの前置詞のうちのいくつかは「後で」のみならず「これから、今後」も意味する。例, *imayori igo* (今より以後), *mayori nochi* (前より後), *imayori xiteua* (今よりしては) など。ラテン語前置詞 “per” 「～を通じて」, “pro” 「～に対して」, “propter” 「～によって」に対応する日本語は *taixite* (対して), *taixi tamaite* (対し給ひて), *yotte* (よって), *uyeyori* (上より) である。例, *Dios nitaixi tatematçuite*⁵²⁾ (デウスに対し奉りて), *Christo varerani taixerarete* (キリスト我らに対せられて) または *taixitamaite* (対し給ひて) など。*motçu* (持つ) と同じ意味の動詞 *taixi*, *suru*, *ita* (帯し, 帯する, 帯した) から派生した *taixi* (帯し) は, *buguuo taixite* (武具を帯して) のように用いる。動詞 *mucō* (向かう) と *mucai* (向かひ) の関係も同様である。小辞 *niyotte* (～によって) が別の語と結びつくと「したがって」を意味する。*yuye* (故) から出た *yuyeni* (故に) や *yuyeva* (故は) というのもある。その他, *soreniyotte* (それによって), *ximo* (下), *vaqi* (脇) などがある。例, *gomisano vaqi* (御ミサの脇)。

ここで第1巻で述べたことをまとめておく。*cara* (～から), *yori* (～より), *de* (～で), *motte* (～もって) は [カスティーリャ語の] “por” すなわちラテン語の “per” の意味である。後置詞 *motte* には “con” の意味もある。例, *Iesus no minau motte* (イエスの御名をもって)。こ

こから副詞 *motteno foca* (以ての外), *mottomo* (尤も) または *mottomo mottomo* (尤も尤も) が出る。同じことは *to* (〜と) についても言える。多くの意味があるばかりでなく、合成語を構成する。例, *tócara deta* (疾うから出た)⁵³⁾, *toye mairu* (外へ参る)⁵⁴⁾, *Gitô* (地頭) など⁵⁵⁾。その他『語彙集』参照。

[ラテン語の] 前置詞 “*extra*” 「〜の外に」と副詞 “*foras*” 「外に」に対応する日本語は *yoso* (他所), *foca* (外) (*focani* (外に) は副詞), *soto* (外) または *sotoni* (外に) である。例, *Sotoye izzuru* (外へ出ずる)。その他, *tenguai* (天外) すなわち *tenno foca* (天の外), *tengue* (天下) すなわち *tenno xita* (天の下), *tenjó tengue* (天上天下), *tennai* (天内) すなわち *tenno uchi* (天の内) などがある。『太平記』卷三十の例: *Cugue buquanno fitibiti yori focaua qiógiúni fito aritomó miyezariqeri* (公家文官の人々より外は京中に人ありとも見えざりけり)。この例で *qiógiú* は「都の中で」を意味し、仮に *Miyacono uchi* (都の内) と言っても同じことである。

[ラテン語の] 前置詞 “*secundum*” 「〜に従って」, “*juxta*” 「〜に一致して」に対応する日本語は *xitagatte* 「従って」, *voyite* (於いて), *mamani* (俛に), *xidai* (次第), *naxixidai* (為し次第), *naxifodai* (為し放題), *ari arito* (ありありと), *mapponajiyori* (真同じより) などである。これらのうちのいくつかは [カスティーリャ語の] “*conforme*” 「〜に従って, ~するとすぐに」や “*como*” 「〜のように」と訳すこともでき、日本語の文脈から付与される意味に準じて、多くは与格を要求する。例, *soreni xitagatte* (それに従って), *Voconomino mamani moxe* (お好みの俛に申せ) など。『物語』の例: *nozomino mamani* (望みの俛に), *sonata xidai* (そなた次第), *deqi xidai* (出来次第), *nozomi xidai* (望み次第), *ariarito yu* (ありありと言う), *sonata fodai* (そなた放題)⁵⁶⁾ など。

ラテン語の前置詞 “*circa*” 「〜の近くに」に対応するのは *tçuqe*, *uru* (付/就け, 付/就くる) から派生した *tçuqeta* (就けた) で, *coreni tçuqete* (これに就けて) のように奪格を支配するように思われる。ただし、『語彙集』は *soreni tçuite* (それに就いて) のように与格の例を出しているため、語源が *tçui* (対) であるのなら、与格でいいように思われる。

[ラテン語の] 前置詞 “*circum*” 「〜の周りに」対応するのは副詞の *gururigururito* (ぐるりぐるりと) または *gururito* (ぐるりと) である。例, *Gururito curu mazani nauoru* (ぐるりと車座に直る), *Curu mazani mauarini, xengo, sayu* (車座に周りに前後左右), *Xirono uxiroye mauaru* (城の後ろへ回る), *xenten meguri* (回転廻り) など。その他『語彙集』参照。前置詞 “*penes*” 「〜の手中に」には *sobani* (傍に), *xidaini* (次第に) が該当する。

ラテン語の “*circiter*” 「およそ」には *fodo* (ほど), *fan*⁵⁷⁾ (辺?), *fariacu*⁵⁸⁾ (粗略?), *vocata* (大方), *vovoyo*⁵⁹⁾ (凡そ?), *yopodo* (よっぽど), *yoppodoni* (よっぽどに) が該当する。その他『語彙集』を参照のこと。これらの前置詞の大半は名詞の代わりに置かれるため、所有の属格を支配する。

2. その他の前置詞について

ラテン語の前置詞“adversus”「～に反して、～に対抗して」には日本語で mucote (向うて), taxiteteqitote⁶⁰⁾ (敵対して?) が対応し、抵抗や妨害を意味する語根から別の副詞や前置詞を取り出すことができる。例, voyano cataqi (親の仇) または teqi (敵), mufóuo vocono (無法を行う), mufonjin (謀反人), fattouo somoqu (法度を背く) など。前置詞“contra”「～に反して」の意味には cayette (却って), fiqicayete (引変へて)⁶¹⁾, chigote (違うて) などが用いられ, mucai (向ひ) は動詞 mucai, ó, óta (向ひ, 向ふ, 向ふた) に基づく。例, Dios no gonaixouó somoqu (デウスの御内証⁶²⁾を背く)。

ラテン語の前置詞“ante”「～の前に」には日本語の canegane (予ね予ね), canete (予ねて), ijen (以前), ijenni (以前に), mayemaye (前々), maye (前), saijen (最前), xenjit (先日) が対応する。人前を表すために用いられる語は saqi (先), saqini (先に), maye (前), menjo (面上)⁶³⁾, monomaye (者前), giqini (直に)^{じき}, taimenni (対面に) などで、文章語では ara cayime (予め), menjen (面前) などが用いられる。他に, sanjen (産前), sango sanjen (産後産前), dójen (堂前) すなわち dono maye (堂の前) などがある。例, Maye maye yorino votono monogia (前々よりのお殿者じゃ)⁶⁴⁾, Sonatano maye de gozaru (そなたの前でござる), Saijen (最前) または Ijen yori mósu gotocu (以前より申す如く), xenjit (先日) すなわち saqino fi (先の日), Menjouo motte mosube qusoro (面上をもって申すべく候), Saqini susumu (先に進む), Taimen (対面) または Vomoteni mucó (面^{おもて}に向ふ) など。最後の語から taimenjo (対面所) という語が出ている。ここで moto (元) という語に触れておく。この語は転義的に「以前から」を意味することもある。別の例で, xocuno maye (食の前) は xocuno nochi (食の後) の対義語である。

ラテン語の前置詞“trans”「～の向こう側に」, “cis”「～のこちら側に」, “citra”「～のこちら側に、～以内に」には多くの副詞が対応し、別の語と合成する場合や代名詞と合体することもある。代名詞または副詞の項目を参照されたい。例, achi (あち), achira (あちら), achinocata (あちの方), anata (あなた), mucai (向ひ), conofo (この^{ほう}方), conata (こなた), conocata (この^{かた}方), cochinocata (こちの方), cochinochi (こちの地), cami ichinin yori ximo banminni itaru made (上一人より下万民に至るまで) など。

3. 奪格の前置詞について

ラテン語の対格支配の前置詞に相当する語は紹介したが、奪格支配の前置詞に相当する語がまだ残っている。前置詞“a, ab, abs”「～から (離れて)」に対応する日本語は第1巻で述べたように cara (～から), yori (～より), ni (～に) で、[カステイーリャ語の] “en”「～に」, “de”「～から」, “por”「～を通して」の意味をもつ。例, Iglesia cara mairu (エケレジア「教会」より参る), Samayori faitta (狭間^{さまま}より入った), Tenni nijit naqu, chini nixu naxi (天^{にじつ}に二日なく、地^{にしめ}に二主なし), Figa madoye saxi iru (日が窓へ差し入る)⁶⁵⁾。[ラテン語の] 前置詞 de 「～から (下

へ), ~で」は[文字通り] de (~で)である。例, *logode saqueu tçugu* (漏斗で酒を注ぐ)。ラテン語の“ex”「~から(外へ), ~によって」や“de”に相当する語は道具の尊格としても機能する。

前置詞“absque”「~なしに」や“sine”「~なしに」には *nacu* (~無く), *naqute* (無くて), *nacuxite* (無くして), *nanini* (何に), *no note* (~の無うて) などが対応する(第2巻で述べたように, 合成語で用いられる *mu* (無) すなわち *naxi* (無し) もそうである)。例, *Suifenni natçu naxi* (水辺すいへんに夏無し), *muxó* (無性) または *xonaxi* (性無し)⁶⁶⁾, (仏法語の) *muxó muxi* (無生無死) など。ただし, *nanini* (何に) は様々な合成語を造り, 場合によっては疑問詞になる。例, *Nanito xita?* (何とした), *Nanito xita coto?* (何としたこと) または *Nanito xita fito?* (何とした人) など。*nanisama* (何さま) とは強調の語で, *nanisama xeiu ireozu* (何さま精を入れうず) のように用いる。*nanino cano* (何もかも?) は弁護や弁解する際のあれこれの言い方を表す。

副詞 *nacu*⁶⁷⁾ (なっく) には様々な意味がある。例, *Nacu xifataita* (なっくし果たいた), *Nacutçuita* (なっく着いた) など。前置詞“clam”「~に隠れて」には *cacuite* (隠して), *cacurete* (隠れて), *fizocani* (密かに), *ninobi*⁶⁸⁾ (忍び), *ninobininobi* (忍び忍び), *ninobi yacani* (忍びやかに), *nuqe nuqeni* (抜け抜けに) などである。詩歌語では *nijocani*⁶⁹⁾ (密みそかに), *caqimaguirete* (掻き紛れて)⁷⁰⁾ が用いられる。例, *Racuchú fendono buximo nuqe nuqeni mairu* (洛中辺土の武士も抜け抜けに参る: 『太平記』 卷二十九)。

ラテン語の前置詞“cum”「~とともに」には *to* (~と), *tomoni* (ともに), *tomonimotte* (ともにもって), *ai* (合ひ), *de* (~で), *dojini* (同時に) などが対応する。ここで, 合体や仲間を意味する別の語をまとめておく。例, *Voncocoromo faya foreforeto natte* (御心も早ほれほれと
な⁷¹⁾: 『太平記』 卷十八), *Dios no minau motte* (デウスの御名をもって) など。その他, *vomote*^{おもて} (面), *ató* (阿党)⁷²⁾ すなわち *cumi suru tomagara* (与する輩) などがある。

前置詞“pro”「~によって, ~の代わりに」(“per”「~によって」や“ob”「~に向かって」などと同じ) には *ni* (~に) が対応し得る。例, *coreuo toxiyeni*⁷³⁾ *xite* (これを取得にして)。*sugara* (すがら) という語は *michi sugara* (道すがら) のように用いるが, 転義的に *yomo sugara* (夜もすがら) とも言う。その他, *aimayo* (合ひ迷う), *noriai* (乗り合ひ) など。*tame* (~ため) は属格の標識であり, イスパニア語なら“para”と訳されよう。*xite* (~して) は[カスティーリャ語の前置詞]“de”を意味し, *ni* (~に) や *nite* (~にて) と同じで交替可能である。*xite?* (して?) という疑問詞にもなり得るほか, 能の「仕手」でもあり, 現在分詞としても機能する(~して)。

sorasama (空様) は *Camuia sorasamaye voi novota* (髪は空様へ生ひ上った: 『平家』 卷一) のように用いられる。*tocoroni* (ところに) は与格の小辞で動詞と結びつく。例, *marozuru tocoroni* (参らうずるところに)。

前置詞の“in”「~の中に」には日本語の *ni* (~に), *nite* (~にて), *nioite* (~において),

nittote (～にとって), vomote (～をもって) などが対応する。nite (～にて) は現在分詞でもあり yoqi fito nite (良き人にて) のように用いる。前置詞 “post” 「～の後に」には nochi (後^{のち}), go (後^ご) などが対応する。例, bango (晩後) すなわち cureno nochi (暮れの後)。votte (追つて) という語は votte mairo (追って参らう) のように用いる。副詞 “procul” 「遠くに」には touo (遠), tuoqu (遠く), touodouto (遠々と), madovoni (間遠^{まどお}に), facura⁷⁴⁾ (遙か), yenpo (遠方), touoqi cata (遠き方) などが相当する。例, yenció (遠郷) すなわち touoqi sato (遠き郷), yenciñ (遠近) すなわち touoxi chicaxi (遠し近し), toutçufito madouo (間遠) すなわち aida touoi (間遠い) など。

ラテン語の副詞 “palam”⁷⁵⁾ 「公然と, 明らかに」には日本語で aruani (顕に), aruarete (顕れて), aratani (新たに), aqiracani (明らかに), sadacani (定かに), sayacani (さやかに), funmioni (分明に), cacqirito (かっきりと) などの副詞が対応する。例, sadacani miyezu (定かに見えず)。saye, sayuru, sayeta (障え, 障ゆる, 障えた) から, core saye naranu (これ障えならぬ)。「代わり」を表すために日本語ではよく cauarini (代わりに), mioldaini (名代に), suixacu (垂迹⁷⁶⁾) などが用いられる。

前置詞 “tenus” 「～まで」に該当する日本語はこれまで本書で何度か言及した made (まで) や mademo (までも) である。made (まで) は別の語と合成して用いられる。例, Core nade sanjita (これまで参じた), Qiqu mademo gozanai (聞くまでもごぞない), Imafaya ando itaita (今早安堵致した), Tenca imada xizzumarazu (天下未だ静まらず), ima (今) に対し, imada (未だ) は否定辞で時の副詞である。imafodo (今ほど) もそうである。ここで, 第1巻で触れたことに留意する必要がある。いくつかの語あるいは語根はそれ自体の中に何らかの小辞を含み, その際, こうした語尾は文中に置かれぬ。例えば, suisai (水災) すなわち suison (水損) は mizuno vazauai (水の災い) と同じであり, suiro (水路) とは mizuni michi (水の路) である。これらとの類例には事欠かない。他に, figuiú (日中) すなわち finovchi (日の内), quatei (火底) すなわち fino soco (火の底) または fino uchi (火の内) などがある。

第3章 間投詞について

間投詞は感情を発露する。感情にも様々あるため, 間投詞も様々である。aa (ああ) や aara (ああら) は痛みや悲しみの間投詞で, aa (ああ) または Aara canaxi cana (ああら悲しかな) のように用いる。喜びにも用いられ, aara vrexia (ああら嬉しや) のように言い, 疑いなら, Aa vobotçucanai coto cana (ああ, おぼつかないことかな) などとも言う。aa (ああ) はタガログ語の “oo” と同様, 同意を表す語でもあり, [カステイーリャ語の] “sí” 「はい」でもある。

感嘆の間投詞は cana! (～かな), canai! (～かなひ), aa! (ああ), sate! (さて), sate sate! (さてさて), satemo! (さても), samo! (さも) などである。例, Fuxiguina coto canai! (不思議なことかなひ), Aa vobitaxiya! (ああ夥しや), Satemo Dios no uoqinaru vonjificana! (さてもデ

ウスの大きな御慈悲かな), ここで, 副詞 sazo (さぞ) すなわち sacoso (さこそ) について述べておこう。例, Sacoso canaxi carura! (さこそ悲しかるらむ)。

これらの中には別の意味や用法をもつものもある。例えば sacoso (さこそ) は, Sacoso voboximexitçuró (さこそ思し召しつろう) のようにも言う。sate (さて) は挨拶としても用いられ, sate sate (さてさて) や副詞の sateximo (さてしも) も同様である。その他『語彙集』参照。

驚愕の間投詞は satemo (さても), ana (あな), ara (あら), appare (天晴れ), asocana (あそかな), suuaya (すはや), yara yare (やれやれ), yaresate (やれさて), yei (えい), coua (こは), suua (さあ), vaa (わあ) などで, 突然の驚きは hat! (はっ) である。例, Yei corenica! (えい, これにか), Appare qigonxa cana! (天晴れ, 狂言者かな), Couasomo asamaxiya! (こはそも浅ましや), Suua core coso vochúto naretote (すは, これこそ落人なれとて:『太平記』巻二十八) など。

歓喜や賞賛は iyaiya (いやいや), yana (やな), yara (やら), yare (やれ), yareyare (やれやれ), vrexij yana! (嬉しいやな), yareyare modetai! (やれやれめでたい) などである。しかし, yare (やれ) は動詞でもあり, 受動動詞の yabure, yabururu, eta (破れ, 破る, 破れた) と同じである。他に, iya iya migotona coto! (いやいや見事なこと), Qinaru cana! (奇なるかな) などがある。

同情は auare (憐れ), anamuzan (あな無惨), aramuzan (あら無惨) などで, auare (憐れ) は [カスティーリヤ語の] “ojalá” 「どうか~であればよいのに」の意味でもある。例, Auare coreuo xeyocaxi (憐れ, これをせよかし)。この例で caxi (~かし) は gana (~がな) と同じで, 感嘆や驚きの間投詞である。他に, Auare coreuafigorono aramaxi gotoga qicoyeta (憐れ, これは日頃のあらまし事が聞こえた)。

遺憾や後悔は ha (は!), Netto netto moxitchumeta! (ねったうねったう⁷⁷⁾ 申しつめた), Netto moxitchuro! (ねったう申しつろう), Fuxiguina coto canai (不思議なことかな) などである。

勧告や激励は iza (いざ), izaiza (いざいざ), yeiyatto (えいやっと), izararaba (いざさらば), izaya (いざや), izaite qico (いざ行て聞こう) などである。ここで, 物を引っ張るときや持ち上げるときのかの叫びの語についてまとめておく。例, yeisara (えいさら), yeisato (えいさと), yeitocosa (えいとこさ), yeiyosa (えいよさ), yeiyei (えいえい), yeitomona (えいともさ), yeya (えや) など。このような調子で他にもある。

不平や痛みは aa (ああ), aara (ああら), ara (あら), areua! (あれは) などである。嘲りは vah! (わあ), 呼ばれたときの返事は at? (あっ) や ariyajuaya⁷⁸⁾ (ありや否や) と言う。副詞の iiaiya (いやいや) は “no no” 「いえいえ」を意味する。vot (おっ) はとっさの返答, xia (しあ) は奮起の間投詞で, xia totte (しあ取って)⁷⁹⁾ のように用いる。coixiya (恋しや) というものもある。

第4章 連結の接続詞と分離の接続詞

連結の接続詞は語と語を結びつけ、文と文をつなぐもので、日本語では to (～と), tatoi (たとい), mo (～も), tomoni (ともに) がその働きをする。例, *Blasto Juanto Nagasaqiye ita* (ブラストとファンと長崎へ行った)。tatoi (たとい) という語は文中で前置され, tomo (～とも) は後置される。例, *Tatoi toqi vtçuri, coto saratomo* (たとい時移り, 事去らんとも)。mo (～も) は上記の to (～と) と同様, 常に名詞や過去分詞に後続し, 様々な意味を表す。しかも, 後続した語によっては *nafodo* (～など?) と同じく, 「～等^{とう}」を意味することもある⁸⁰⁾。例, *Qoyoto voxe tçuqerarei* (公用等仰せつけられい)。また, to には強調の意味もある (疾^と)。例, *totatçu* (疾立つ), *tôcata deta* (疾から出た) など。『語彙集』にその他の意味が出ている。

分離の接続詞は [ラテン語の] “vel” 「もしくは」や “aut” 「～かそれとも」, [カステイリーヤ語の] “o” 「～かそれとも」の意味をもち, 語と語を分けるもので, *ca* (～か), *axuiua*⁸¹⁾ (あるいは), *moxi* (もし), *moxiua* (もしは), *yara* (～やら) などがそれに該当する。例, *Pedro ca Juan ca maire tomoxe* (ペドロかファンか参れと申せ)。*ca* はまた疑問や条件の小辞でもある。例, *Tono sama gozattaca?* (殿様ござったか), *Cousa maittaca miyo* (後車参ったったか見よ)。さらに *ca* は「良いこと」をも表す (可)。例, *Yoxi, ca nari* (良し, 可なり), *catçuua* (且^{かつ}うは)⁸²⁾。また (また) や *mataua* (または) は連結の分離のいずれとしても機能する。*mata* (また) とは「しかしもう一度」, *mataua* (または) は「しかしこれは」のことである。副詞の章および動詞活用の章で述べた副詞や小辞の中で逆説の接続詞としてまとめてもよいものもある。例, *saredomo* (されども), *sarinagara* (さりながら), *saritomo* (さりとも), *todaxi*⁸³⁾ (但し), *xicamo* (しかも), *xica nominarazu* (しかのみならず), *xicano gotoqino tomogara* (然^{しか}の如きの輩)⁸⁴⁾ など。

ここで [ラテン語の] “etsi” 「～けれども」や “tametsi” 「～けれども」, *neque* 「～もない」に相当する語をまとめておく。*attemo* (～あっても), *naritomo* (～なりとも), *nagara* (～ながら), *iyedomo* (～いえども), *nai* (～ない), *naxi* (～なし), *vo* (～を), *tocorode* (ところで), *niyotte* (～によって), *nanto xitemo* (何としても), *nanito* (何と) または *nanito xita con* (何としたことに), *Nanzo iuanya?* (何ぞいわんや), *Nannen vosuru tomo* (何年仰するとも), *Nanito nague qutomo canomai* (何と嘆くとも叶ふまい) など。

第5章 日本語の統語論すなわち構文について

日本語における語の配置は固定化されており, 欧州諸語のそれとは似ても似つかない。その配置が接続的 (膠着的) であることに関して言えば, 我々のバスク語といくらか類似している。

[規則1]

[名詞の] 主格は文頭に置かれ、動詞は常に最後にくる。『語彙集』の多くの例で見られる通りである。副詞は必ずしも動詞に後続するとは限らず、むしろ先行することが多い。他の品詞は、入る余地さえあれば置くことができる。その用法を示してみる。ただし、時の副詞は常に後置される。例、Teraye mairo toqi (寺へ参らう時)、Febi vaguetamatte itaga, nivacani suguni natta (蛇縮わげたまつてゐたが、にわか すぐ 俄に直になった)⁸⁵⁾。

重厚な文章体ではよく主語が動詞に後置されるため、『懺悔録』では Coreni yotte tanomi tatematçuru itçumo Virgen no Santa Maria (これによって頼み奉るいつもビルゼンのサンタ・マリア) のように書かれている。すべての動詞は暗黙裡であれ明示的であれ主語を要求する。例、iqe (行け) または vare iqe (我行け)。

敬語動詞はその人称に従う。敬語によって誰について話をしているのかが分かるようになってくる。日本語と中国語はこの点できめ細かいのだが、上位者を指す最も主要な語句を省略する。規則にはそのように書かれている。例、Yorocobini voboxi mesu (喜びに思し召す)。

文中に多くの形容詞があるとき、格表示の小辞や前置詞なしで副詞的に用いられる。多くの場合、(上記のように) 接続詞なしで最後の名詞に格が示される。例、Qenagó iro curo icanimo utçucuxij mono (毛長う、色黒う、いかにも美しい者)。合体した二つの名詞がそれぞれ別のものであるとき、所有格の表示をもつ方の名詞が属格に置かれる。例、Dios no gosacu (デウスの御ご作)、tenno ataye (天の与え) など。

文中に二つの動詞が同時に現れると、最初の動詞は必ず現在分詞⁸⁶⁾ で用いられる。例、Coreuo totte giçini mi ga comono ni vataxe (これを取って直に身が小者に渡せ)。この例で totte は動詞 tori, toru, totta (取り、取る、取った) の現在分詞で、vataxe は動詞 vataxi, vatasu, vataita (渡し、渡す、渡した) の命令形である。純粋なロマンス語なら、“Tomando esto, entrégalo a mi criado.” 「これを取って、私の召使に渡しなさい」と訳されよう。翻訳は日本語の文脈と現在分詞の用法を理解してもらうためにこれまで何度か付されている。

日本語はカスティーリャ語にもラテン語にも似ていないため、叙法でも時制でもしっかりと区別しておく必要がある。おそらく文法上の破格はあるだろう。カスティーリャ語では過去で表されることが、日本語では未来に訳されることもある。例、Qessa cara só voxerare tareba mofaya de maraxo (今朝からさう仰せられたれば、もう早出ませう)。

同一の主語や時制について話す二つ以上の文があるとき、最後の動詞は共通して文が要求する理論的時制 (= 絶対時制) で表され、先行する動詞は常に語根の形で、または -e で終わる動名詞の形で置かれる。これは言い回しが隠喩的なときでも起こり、『語彙集』の多くの例で見られるように、特殊な語根が一般動詞に先行する。

分詞と動名詞が重複して用いられる場合もある。『平家』巻二十の例：Macatouo⁸⁷⁾ tçucuxi, riuo qiಾಮete nota maiqereba (誠を尽くし、理を究めて宣ひければ)、巻二十八の例：Fayacu soqidatte⁸⁸⁾ chicuten xiqereba (早く先立って逐電しければ) など。

[規則2] 所有の属格

助詞の no (～の) は属格と主格とが混同されやすく、形容詞と実詞とが同形であることもよくある。例, *iifino cocoro* (慈悲の心)。まさにこの混同は、助詞の *ga* (～が) や *uo* (～を) にも様々な状況によることから起こり得る。

数詞、部分属格、多数を表す名詞は多くの場合に属格を要求する。すでに本書で述べたように、属格の前置詞として機能する語をここでまとめておく。このような語はあるときは副詞的に、あるときは名詞の代わりに用いられ、属格を支配する。例, *funeno mauarini tachi tçura natta iroino fata* (船の周りに立ち連なった色々の旗), *fayaxino aida* (林の間), *fayaxino xita* (林の下), *danjó* (壇上) すなわち *danno uye* (壇の上) など。

次の合成語はこの一般規則から外れる。その合成語から結果的に第三の合成名詞が生じる。イスパニア語訳では所有の属格表示で表されるが、日本語ではそうでない。例, *rincan* (林間), *rinca* (林下), *teixó* (庭上), *riuxó* (柳上) など。第1巻を参照のこと。

ここから、あるときは実詞的、あるときは副詞的に用いられる多くの語は属格を支配することが分かる。ゆえに、これらの前置詞も副詞も第1巻で取り上げた格助詞を容認する。『四書』の例: *Chixa anxuno tameni facurazu*⁸⁹⁾ (智者^{あんしゅ}闇主^{はか}のために謀らず), *Vozeino nacauo zatto caqeyabutta* (大勢の中をざっと駆け破った), *Macatouo itçuvarino yóni caqinaxite* (真を偽りのように書きなして) など。

所有の属格を要求する他の形容詞を挙げておく。例, *Te, axino sauayacana fitogia* (手足の爽やかな人じゃ)。その他、本書中の *yoni* (～様に) と *yona* (～様な) の例を参照のこと。

[規則3] 与格について

類似性や異質性を意味する形容詞は、同じ意味をもつ動詞と同様に与格を要求する(おそらく名詞は属格で現れるが)。例, *Rei naqiuá chicuxoni vonaji* (礼なきは畜生に同じ), *Mainenno reini macaxe* (毎年の例に任せ), *Giogan tamani nitari* (魚眼玉に似たり)⁹⁰⁾ など。

ここで、形容詞として用いられる動詞の過去分詞をまとめておく。例, *Voyani co nita* (親に子似た), *Soreni xitagatte* (それに従って) など。

[規則4] 奪格について

多くの過去分詞は奪格で構成される。例, *Bumeni canóta fito* (武命に適うた人), *Bunptni taxxitafito* (文筆に達した人) など。

比較級と最上級はラテン語と同様に奪格を要求する(与格のほうが望ましい場合もある)。例, *Acuninra gosacuno monouo gosacuxani vomoi cayuru* (悪人ら御作の物を御作者に思ひ換ゆる)⁹¹⁾。

動詞 *sugui*, *suguru*, *suguita* (過ぎ, 過ぐる, 過ぎた) は与格と構成される。例, *Bunni suguita qirumonogia* (分に過ぎた着る物じゃ), *bunni* (分に) または *buzaini suguita furumai* (分際に過ぎた振る舞い) など。

[規則 5] 様態, 過剰などの奪格

助詞の ni (～に) (すでに述べてあるように, その一般的用法は与格, 副詞, 過去分詞, 目的分詞, 場所の副詞などに及ぶ) にも様態, 同伴, 過剰, 原因などを表す機能がある。例, Icqı vöjeini caqemuco (一騎大勢に駆け向ふ), Fitonamini fazzuru (人並みに外る), conjó goxó tomoni (今生後生ともに)⁹²⁾ など。

原因の用法。『物語』の例: Soreni yotte, christiano fitamononi fanjo tçucamatçuru (それに依ってキリシタンのひたものに繁盛仕る)⁹³⁾, Dios no gofoconi bajiuo naguevtçu (デウスの御奉公に万事を擲つ) など。

様態の用法。例, Fippacuni voyobu (逼迫に及ぶ)⁹⁴⁾, Rini tçumaru (理に詰まる), Nagueqini xizzumu (嘆きに沈む) など。『平家』巻四の例: Xiuocajeni yaxe coromi⁹⁵⁾ sono fitoto miye saxerarenu (潮風に痩せ黒み, その人と見えさせられぬ)。

[規則 6] 動詞の被制格

ラテン語と同様, 能動動詞は対格を要求する。例, Xixi fitouo camu (獅子人を噛む)。この例に見られるように, 格助詞を省略することもある。

やはりラテン語と同様, 受動動詞は動作を受ける主格人称と動作を起こす奪格人称で構成される。例, Fitouo⁹⁶⁾ xixiuono aguetoni cacaru (人は獅子王の顎にかかる), Teqini caritateraruru (敵に駆り立てらるる), Teqini fisaruru (敵に比さるる) など。なお, 動作主の奪格表示には cara (～から) や yori (～より) も用いられる。

[規則 7] 対格の後の与格

多くの能動動詞は事物対格の次に人物与格をとる。これに反する例もある。例, Vmani mameuo có (馬に豆を請ふ), Pedroni chiguiouo atevocóno (ペドロに知行を宛て行ふ), Fitoni togauo iyvosuru (人に料を言ひ負する)⁹⁷⁾, Francisconi Sacramentouo sazzucuru (フランシスコにサクラメントを授くる), Eclesiauo tenno cunini tatoryuru (エケレジアを天の国に喩ゆる), Fitoni atauo nasu (人に仇をなす), Voyano ixxeqiuo coni fuoqusuru (親の一跡を子に付属する)⁹⁸⁾ など。

中には奪格を要求する動詞もある。例, Tacarani aqidaranu (宝に飽き足らぬ)。ここで, 本来の意味または隠喩的な意味で用いられる場所の奪格についてまとめておく。動詞 caqi (欠き) は奪格を支配し, その格で「欠けているもの」を示す。例, Camini coto caita (紙に事欠いた), Cate fironi tçumaru (糧, 兵糧に詰まる)⁹⁹⁾ など。他の本来の意味あるいは転義的な意味でなら対格を支配する。

[規則 8] 自動詞

日本語に中性動詞と呼ばれるものは一切ない。すべての動詞に対格を付することができるからだ。

例, Fitouo fazzuru (人を恥ずる)。自動詞も同じ性質をもつ。例えば, yorocobi (喜び) という動詞は対格を支配する。

自動詞の多くは与格を要求する。例 Yerioni tagó (衣料に違ふ), Fitoni ayacaru (人に肖る^{あやか}), Dios ye qibucu xitatematçuru (デウスに帰服し奉る), Mexini xitago (召しに従ふ), Voyani tatezuqu (親に盾突く), Fitono cocoroni tauó (人の心に違ふ)¹⁰⁰⁾, Coreua mini ataru (これは身に当たる), Qenxin jicunni tçucayezu (堅臣二君に仕えず), Chocani tçucavaruru (朝家^{ちようか}に仕わるる), Fanxen cajeni macasuru (帆船風に任する) など。

これらに運動の自動詞が加わる。「どこへ」と問われたら, ni (〜に) や ye (〜へ) で答える動詞のことである。例, Faiqini tçuqu (蠅騎^きに着く), Coni foruru (子に毫^ほるる)¹⁰¹⁾, Teqini vomoitçu (敵に思ひ付く)¹⁰²⁾, Cuniu doua mina Fidefiradononi vomoitçuqu (国人^{くにうど}は皆秀衡殿に思ひ付く) など。これらの例はすべて獲得の与格である。

[規則 9] 絶対奪格について

分詞構文の項目で見たように, ここでは絶対奪格(ラテン語ではそう呼ばれていた)についてまとめておく。例, Binguini macaxete fumiyo caqu (便宜^{びんぎん}¹⁰³⁾に任せて文を書く)。分詞(動名詞と呼ぶ人もいる)が(第2巻の活用表3に基づいて)現在を示すのか過去を示すのかが分かるように, それぞれの例が反映された二文を挙げる。『太平記』巻二十六の例: Sanjunin vomoivomoini fara caqiqitte vyega vyeni casanarifusu (三十人思ひ思ひに腹かき切って, 上が上に重なり臥す); 巻三十三の例: Noborano tçuyuni sodeuo cataxiqitte naqiacaxi (のぼらの露に袖をかたしきて泣き明かし)。

場合によっては, 動詞の単純形でも複合形でも, (上記のように過去分詞として機能する) 語根すなわち現在の価値をもつこともある。『太平記』巻三十の例: Feifeino xitaruno nacani ginuo fari (へいへいとしたる中にぎぬを張り); 『発心集』巻四の例: Biuano catachio tçucuri vmano vouo caqefiqi naraxi (琵琶の形を作り, 馬の尾をかけひき鳴らし)。ここで, ラテン語なら絶対奪格と呼ばれることに留意されたい。日本語ではそうでない場合もあり, 格助詞が省略される場合さえあるからだ。そこで, 次の文と動詞の性質に注目されたい。例, Ienga tçuiureba, acuga youaru (善が潰ゆれば, 悪が弱る)。これらは主格である。

第1巻で述べたように, 具格には de (〜で) が用いられる。例, Suqide foricayesu (鋤で掘り返す), Cobuxide yamasuru (拳でやます)¹⁰⁴⁾ など。

[規則 10] 動詞の不定法について

非人称形の動詞は動作を引き起こす人称, すなわちその前にある主語をラテン語のように対格に置いて支配するのではなく, 主格に置いて支配する。たとえ動詞が不定法になっても同じある。例, Pedroua maittato mosu (ペドロは参ったと申す), Sonozaimocu mina motono gotocufacobi cayexeto aru (その材木皆元の如く運び返せとある) など。

動詞 *iri, iru, itta* (要り, 要る, 要った) は二重の主格を取り得る。例, *Core iru cotogia* (これ要ることじゃ)。あるいは, 与格に置くか副詞的に用いてもよい。例, *Vatacuxi vaconi canega iru* (私我子に金が要る) または *Vatacuxini* (私に…)。

常に不定詞で用いられる動詞も多い。例, *cacayacaxi* (輝かし)。別の動詞と複合した起動相や完了相の動詞もそうである。例, *qiqifajime* (聞き始め), *minaruru* (見慣るる), *qiqifatasu* (聞き果たす), *mi aqu* (見飽く) *qiqi aita* (聞き飽ひた) など。

同じ性質をもつものとして, *tai* (～たい), *tomonai* (～たうもない)¹⁰⁵⁾, *cane* (兼ね)¹⁰⁶⁾, *sumaxi* (済まし), *soconai* (損ひ), *fague maxi* (励まし), *sugoxi* (過ぎし) など。その他は第2巻参照のこと。

[規則 11]

分詞と動名詞は, 組み合わせる用いる動詞と同じ格を支配する。例, *Voyano atoxiquo fumayete* (親の跡式を踏まえて)¹⁰⁷⁾ または *aifumayede* (相踏まえて), *Aixirouo tçuqete, xirouo xemuru* (相城をつけて, 城を攻むる), *Atoya macurani tachiyorite* (跡や枕に立ち寄りて)¹⁰⁸⁾, *Fatauo finmaite* (旗をひん巻いて) など。

語形変化のない語根と結びつく一般動詞も多く, 場合によっては副詞的に用いられる動詞や, 動詞の被制格に応じて格助詞と結びつく動詞もある。日本語修辞学の比喩の項目で取り上げるように, これは例外的な言い回しである。

[規則 12] 場所の副詞について

場所の副詞には助詞 *ni* (～に), *de* (～で), *ye* (～へ), *cara* (～から), *yorì* (～より) が用いられる。助詞の *ni* と *ye* は交替可能で, 「どこに」「どこから」「どこへ」「どこを通過して」「どの方向へ」を表す場所の副詞として機能する。

本来の意味, あるいは隠喩的もしくは示唆的な意味をもった静止や運動の動詞は, *ni* (～に) を後置して, *dore* (どれ) や *doco* (どこ) を表す副詞を伴う。例, *Mura* (村) または *Machi fazzurenì sumu* (町外れに住む), *Dorini*¹⁰⁹⁾ *mayo* (道路に迷う), *Vmini vochi iru* (海に陥る), *Cachuni xizzumuru* (渦中に沈むる), *Batzani nauoru* (末座に直る), *Fafóno*¹¹⁰⁾ *tomogara gigocuni votçuru* (不法の輩地獄に落つる), *Fonxonì naru* (本性になる), *Funeuo xeni faxe agueta* (船を瀬に馳せ上げた), *Gofozani nauora xerarei* (御法座に直らせられい) など。

ここで, 時の副詞をいくつかまとめておく。例, *bangue gotonì* (晩景ごとに), *asagotonì* (朝ごとに), *farugotonì* (春ごとに), *socujini* (即時に), *acuni chozuru* (悪に長ずる), *icusani* (戦に) など。助詞の *ye* (～へ) も「どこに」を表すことができる。例, *Miyacoye catanauo atçurayuru* (都へ刀を誂ゆる)。

ye (～へ) はまた, 「どこから」を表す副詞にも用いられる。第1巻で挙げた受動動詞と用いられる前置詞 *cara* (～から) や *yorì* (～より) もそうである。例, *Foçicara votçuru* (ほき¹¹¹⁾ か

ら落つる), inixiye conocata (古^{いにしえ}この方), soreyori conocata (それよりこの方) など。

ye (～へ) はまた、「どこを^い通って」や「どの方向へ」を表す副詞にも用いられる。例, Qimiuo yentoye faixitate matçurite (君を遠島へ配し奉りて), Conata¹¹²⁾ conatauo femeguri maraxita (彼方此方^{かなたこなた}を経廻りまらした), achi cochi (あちこち) すなわち anata conata (彼方^{あなた}此方^{こなた}), docomo caxicomo (何処^{かしこ}も彼処^{あそこ}も) など。

ni (～に) や ye (～へ) などは「どこへ」を表す副詞にも用いられる。例, Fijen (肥前) または Nagasaqini itaru (長崎に至る), Miyacoye maitta cotoua imafatçu de gozaru (都へ参ったことは今初でござる) など。

最後に、格支配の文脈に注意されたい。というのは、一つの同じ語根で意味が異なる場合があるからだ。例えば, umani noru (馬に乗る) は奪格で「乗馬する」の意味だが, uma^{うま}uo noru (馬に乗る) は対格で「馬で行く」の意味になる。別の動詞についても、同じことが本来の意味でも転義の意味でも起こる。

訳注

- 1) 原文ママ。『日葡辞書』に itçuzo は出ているが itçuco という語は存在しない。著者の誤記であろう。
- 2) 原文ママ。issacuya の誤記であろう。
- 3) 家来一人一人が主君から盃を頂いては下がる宴会。
- 4) 古く。古風に。
- 5) 稀に。
- 6) 原文ママ。axita の誤記であろう。
- 7) 四時にまだ少し間のある夕刻。
- 8) 原文ママ。コリヤードの『日本文典』には jigòn igo が出ているため、この語の誤記であろう。
- 9) 今後。
- 10) 原文ママ。connichigi^u の誤記。
- 11) 原文ママ。何を指すのか不明。前後関係から「即座」に関する意味の副詞であることに間違いはないが、『日葡辞書』にもコリヤード著『日本文典』にもこの語は出ていない。後者における「時の副詞」の項目を参照すると socujini の前は tachi maqi (忽ち) であるため、何かの間違いでこの語を誤写した可能性も否めないが、同一視するにはやや無理がある。
- 12) 原文ママ。conofodo の誤記。
- 13) 原文ママ。conogiu の誤記。
- 14) 過去数日間。
- 15) 先般。
- 16) 原文ママ。tocoroni の誤記であろう。
- 17) 詩歌語で「あちこち流浪して」の意。
- 18) そのうえに。
- 19) 原文ママ。canegane の誤記。
- 20) 「ほうど」も「とうど」も「全面的に」の意。
- 21) 原文ママ。narabini の誤記。
- 22) 特に。

- 23) 特異に。
- 24) 原文ママ。nomi の誤記。
- 25) 物寂しげに。孤独に。
- 26) 原文ママ。amassaye の誤記であろう。
- 27) すべて。すっかり。
- 28) 注 20 に同じ。
- 29) 辛うじて。
- 30) 原文ママ。sasocu 誤記。
- 31) 心を惹かれて。
- 32) 心配して。
- 33) 自分の手で。
- 34) 原文ママ。docoyorimo の誤記であろう。
- 35) 原文ママ。sunauachi の誤記。
- 36) 非常に。
- 37) どれほど。
- 38) どうしてもできない。
- 39) 原文ママ。xencocu の誤記。
- 40) 傍らに。
- 41) 頭を上げたり下げたりするほどの瞬間。短時間。
- 42) 脅しの表現で、「さあ、目にも物を見せてやる」の意。
- 43) 原文ママ。『日葡辞書』には izaiteqico と出ている。
- 44) 急いで行こう。
- 45) 原文ママ。domo の誤記か。
- 46) 原文ママ。『日葡辞書』には mapponajiyoni と出ている。
- 47) この事が起こって以来。
- 48) まったく聞こえない。
- 49) ぴったりと密着して。
- 50) 寝室の内部。
- 51) 最上のもの。
- 52) 原文ママ。tatematçurite の誤記 (Zwartjes: 10)
- 53) 急いで出た。
- 54) 便所に行く。
- 55) これらの例に現れる to は、助詞の to (〜と) と無関係であり、著者の事実誤認である。
- 56) あなたの意のままに。
- 57) 原文ママ。fen の誤記か。
- 58) 原文ママ。soriacu の誤記か。
- 59) 原文ママ。voyoso の誤記か。
- 60) 何を指すのか不詳。teqitaixite の誤記かと思われる。
- 61) 反対に。
- 62) 御意志。
- 63) 面と向かって。
- 64) 「ずっと前からあの方は私を知っていて、懇意にしてもらっている」の意。「お殿者」とは「ある貴人との親戚関係」を意味し、自己を謙遜し、その貴人を敬って言うときに用いられた。
- 65) この例は尊格ではなく対格のはずだが、カステイーリャ語訳は“el sol entra por la ventana”となっており、この例の「窓へ」について著者は尊格という理解をしている。

- 66) 気力がない。
- 67) 原文ママ。『日葡辞書』には *naccu* と出ている。「思いがけず早期に」の意。
- 68) 原文ママ。 *xinobi* の誤記。
- 69) 原文ママ。 *misocani* の誤記。
- 70) 密かに。
- 71) 心も夢中になって。
- 72) 同じ陰謀や悪事をはたらこうとして、同じ徒党に属する者たち。
- 73) 『日葡辞書』には *toriyeni* と出ている。「取得」は「きっかけ」の意。
- 74) 原文ママ。 *faruca* の誤記であろう。
- 75) 原語は“*preposición*”となっているが、 *palam* という語は副詞であるため、便宜上ここでは「副詞」と訳した。
- 76) 神仏が仮の姿である場所の守護をするなど、本姓の役割を務めていること。
- 77) 「妬う」の促音便に由来する。
- 78) 原文ママ。 *ariyajnaya* の誤記 (Zwartjes: 10)。
- 79) すぐさま取ってくれ。
- 80) ここで著者は *tó* (等) と接続詞の「と」とを混同している。
- 81) 原文ママ。 *aruiua* の誤記であろう。
- 82) 接続詞で、「一方では」の意。
- 83) 原文ママ。 *tadaxi* の誤記。
- 84) これに類したもの。
- 85) 蛇がとぐろを巻いていたが、急に体がまっすぐになった。
- 86) 原語は“*gerundio*”で、これまでは「動名詞」と訳していたが、ここは明らかに現在分詞の機能について言及しているため、敢えて「現在分詞」とした。
- 87) 原文ママ。 *Macotouo* の誤記。
- 88) 原文ママ。 *saqidatte* の誤記 (Zwartjes: 10)。
- 89) 原文ママ。 *facarazu* の誤記 (Zwartjes: 10)。
- 90) 魚の眼は宝石に似ている。
- 91) 悪人は創造主よりも創造された物を愛する。
- 92) 現世も後世も。
- 93) そのため、キリスト教の教えは引き続いて普及するばかりだった。
- 94) 困難に遭遇する。
- 95) 原文ママ。 *curomi* の誤記 (Zwartjes: 10)。
- 96) 原文ママ。 *Fitoua* の誤記か。なお、この例は「人が獅子に食われる」の意。
- 97) 人に罪を着せる。
- 98) 親の財産を子に譲る。
- 99) 食料が欠乏する。
- 100) 人の心に合わない。なお、 *tauó* は原文ママで、 *tagó* の誤記である。
- 101) 子に愛情を注ぐ。
- 102) 敵側に心を寄せる。
- 103) 好都合な使いの者。
- 104) 拳固で殴る。
- 105) ～したくない。
- 106) 困難である。
- 107) 親の財産を相続して。
- 108) 足の方や枕に近寄って。

- 109) 原文ママ。Doroni の誤記。
- 110) 原文ママ。Fufóno の誤記。
- 111) 断崖絶壁のような高所。漢字は不詳。
- 112) 原文ママ。Canata の誤記。